

---

# Twin Genesis Online

野衣本フーコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Twin Genesis Online

### 【Nコード】

N7157Y

### 【作者名】

野衣本フーコ

### 【あらすじ】

Twin Genesis Online VRMMORPGの革命児。他の追随を許さない圧倒的なスペックを以て世界最高のゲームとなる…筈だった。そう、ゲームの支配者たるAI 《ペンデント》の暴走が起きるまでは。

11/21 諸事情により、こちらで掲載させて戴く事になりました。

？

これは 俺の戦いの記録。

この記録をつけ始めてから何日が経ったか…。  
よく覚えていない。

思い返せば色々な事があった。

初日から冤罪で牢獄にされるわ、友人にも置いてかれるわ、またまた牢獄送りになりそうになるわ、それから！！

キリがないので止めよう…テンション下がる…、

ゴホン…。

とにかく！！明日には全ての決着が着くのだ。  
今は万全の状態で挑む事だけを考えよう！！

最後に、もしも、万が一俺が“脱落”したら いや、有り得ないか、俺強いし。

無いこと書いても仕方無いか！！ハッハッハ！！

第99層 《エנדダスタート》より記す

？

「まだか！？もう一時間は経ったぞ！！」

一際大きな盾を携えた大男の声が戦場を駆ける爆音を越えて届いた。

「《ベヒモス》のHP残量は！？」「二割弱です！！」「回復<sup>ヒール</sup>まだか！？クソツ！！」

飛び交う怒号や指示がここからだとよく聞こえる。

うんうん、中々良い眺めよのう（笑）

ん？ルイスのヤツ今『臆病者』呼ばわりしやがった！！バリーもガツンと言ってやれよ！！『アイツはそんな男じゃない！！』って！！

「《ベヒモス》のHP残量一割切りました！！」

おっと、出番みたいだ。

我らがリーダー、“白帝”ミカドが右手を挙げたのを合図に俺は動き出した。

第99層のボスモンスター《ベヒモス》の弱点であるその背後へと向かって走る。  
ウィークポイント

え？気付かれたらどうするって？

愚問だな、ホント。

俺、今は透明人間だからバレないの（笑）

ほらな、背後に立っても気付かれな　　うおっ！？アブねーなオ  
イツー！！

見えてんじゃねーのコイツ…？

「早くしろ変態紳士！！」<sup>タンク</sup>「壁の気持ち考えろや！！」<sup>ヘマ</sup>「た  
らPKしてやるからな！？」

その殺気、ベヒモスに向けるよ。  
遊びが過ぎたのは認めるけどさ…。

さて　　、それじゃあサクツと倒しますか。

30分後。

それはもう鮮やかに背後から18連撃技をクリティカルヒットさせ  
てボス撃破！！  
で、意気揚々と仲間のもとに戻ったわけですよ、そしたら…

『さて、アイテム全部出してもらおうか…？』<sup>それじゃあ誰がメ  
イトを殺るかジャンケンな？</sup>』

皆さん、目が本気です。本気と書いてマジと読みます。

「何でだよ！？俺、役目は果たしたぞ！？」

抗議、猛抗議、命の危機で黙ってられるか！！

「テメエ…遊んでたろ…？」

ヤクザみたいな口調のこの娘はレイナ。

全身白のフリフリドレスみたいな格好のロリ顔少女は今日“も”どす黒いオーラを俺に“だけ”向けている。

要するにツンデレなんです。

デレた事無いけどね

「ハッハッハ、モテる男はツライな」（笑）

「お前ら下がってろ、巻き添え食うからな。」

そう言っ取り出したのはこれまた真っ白なバズーカ

「　　って、待った！！バズーカって対人用じゃないと思うんだケド！？」

「それぐらい知ってるっの、だからテメエ以外に向けたりしねえよ。」

俺って人として認知されてなかったの！？

「はじける」

「いやあああああッ!!」

これが、攻略組ギルド 《白龍》の日常である。

VRMMORPG “ Twin Genesis Online ”。

実装版解禁日にログアウト不可となったこのゲームは、製作者の陰謀では無くこのゲームのGMたるAI“ペンデント”の暴走によるものらしい。

唯一の脱出方法はゲームクリア、つまり100層のボスを倒す事らしい。

ここまではありがちな話だな、漫画やライトノベルでもよくある鉄板ネタだ。

あとはプレイヤーが手と手を取り合い仲良く協力してめでたくクリア。

なら、どれほど良かった事が……。

『このゲームでは全員が戻る事は不可能です。』

それが、支配者からの最後の言葉。



と言っても、俺は聞いたわけじゃない。

その言葉を直に聞いたのは当時のトッププレイヤーのみだ。

『“白”と“黒”、“魔王”の命を絶った陣営にのみ与えられる権利なのです。どちらかを“犠牲”にする事で、現実へと戻る事が出来るのです。』

この世界のプレイヤーは二分されているというわけだ。

互いが助かりたいと思うほどに溝が深まっていく、悪魔のシステム。

皆、恐れているのだ。

明日、ゲームがクリアされて、自分が消えてしまう事を。

だからああやって気丈に振る舞って、不安から逃れようとする。

“ただの”デスゲームなら、こんな思いも無いだろうに…。

もしかすると、ペンデントはとても人間的な機械A Iなのかもしれない。

ふと思い至った時、アラームが鳴った。

午前0時を告げる音が部屋に鳴り響く。

ベットから体を起こすとアイテム欄から一冊の本とペンを取り出す。ギルドの連中には内緒にしてある。

あいつらに見られたらと思うと顔から火が出そうだ…。

日記なんてそんなモンだよな？

誰かに見せるわけじゃないけど書く、強いて言うなら自分に見せるため、みたいなモンだよな？

本を開く。

1ページ目には『“第10層 《ウォーラ》より”』とだけ記されている。

そうそう、ここで全財産の半分も使って買ったんだっけ…。

その後も色々と書かれていた。

愚痴や喜び、痛み…。まるで昨日の事のように思い出せる。

最後の１ページ、白紙のページ。

「第９９層 《エンダースタート》」

これで、おしまいだな。

そうだ、“約束”。忘れるところだったな。

『たとえ今日死ぬとしても、命尽きるその瞬間までは全力で生きる。諦めた者に奇跡は訪れぬ。』

この本の持ち主との約束だ。

「奇跡か…。」

皆が笑って終わられるハッピーエンド

奇跡があるというのなら、まさにそれだろう。

そんなものは無い。

解ってはいる。理解もしている。けど、

「信じるのは自由だよな、」

独りごちて、眠りについた。

？

俺は今ゲームの中にいる。

VRMMORPGってヤツだ。名前くらい聞いたことあるだろ？

で、そのテの話には付き物の『ログアウト不可状態』だ。笑えねえな、ハハッ。

ん？なんでゲームに閉じ込められてるのに悠長に構えてられるのか……か。

簡単な事だ。

俺は脱出不可能なゲームの中で、囚われの身、だからだ。

「ウオオオオオオッ！！！！！」

走る。風を切るように走る。

「早くしないとおおおお！！！！！」

俺の横で、同じく全力で走っているのは親友の姿。入念にセッティングされていたであろうツンツン頭がグチャグチャになっている。しかし今はそんな事はどうだって良い。

「おい、貴史！！今何時だ！？！」

腕時計をチラッと見る貴史。

「あと五分！！ギリギリだ！！」

「チクシヨウ！！急ぐぞ！！」

「わかってらあ！！」

道を全力で駆け抜ける高校生の姿はさぞや恐ろしいものだろう。しかし、1つだけ断っておこう。

俺達はマトモだ。

いや、少々中毒気味のゲーマーである事は認めるが、何も気が触れた故の奇行ではない。

今日はVRMMORPG、“Twinn Genesis Online”の実装版解禁日であり、版から“TGO”をプレイしている俺達としては何としてもスタートダッシュを決めたい。一秒でも早く家に帰りたいのだ。

考えてみて欲しい。

クリスマスの夜、プレゼントが待ち遠しくてなかなか寝付けない時のあの高揚感。それに似た感情が昼休み辺りから胸を占めて、家に帰りたい衝動を自制心総動員でなんとか押さえ込んでいたのだ。

反動でこんな風になっても仕方無いのか？いや、仕方無い筈だ！！

ここから家まで約三分。部屋着ジャージに着替えるのに一分。間に合うか…

！？

そこから俺は一切の思考を止め、力の限り走った。

「ただいまぁッ！！」

母の『おかえり〜。』という呑気な返事を待たずに玄関横の階段を二段飛ばしで駆け上がる。

「あと二分しかねえ！？」

ドアを開けると時計が目飛び込んだ。タイムリミットまで時間は殆どない。

こうなる事を予測していた俺は予め用意しておいたジャージに着替えると、同じく待機状態でセットしておいたVR用機器“アナザー”を慣れた手つきで装着する。

制服が脱ぎっ放しだが、この構ってはいられない。起動スイッチをONにすると、突然睡魔に襲われ、意識が途切れた

気が付くとそこは闇の中だった。

『バグか！？おいおいマジかよ…。』と溜め息をつこうとしたその時、いつの間に現れたのか、目の前でピエロがこちらをじっと見て

いるのに気が付いた。

しかも光ってるよな、この人…。

真っ暗な中、電球のように光り輝く姿は不気味さをより一層引き立てている。

実装開始記念のイベント…なのか？

若干腑に落ちないまま、一言も発しようとしないうちにピエロに恐々といった感じで問いかける。

「あのお…？」

すると、まるで彼の意を汲んだかのようにピエロが口を開いた。

「１ツ、選ビナ、」

いつの間に取り出したのか、両手にはそれぞれ１つずつ小さな立方体の箱を乗せてこちらに差し出している。

「黒と白の箱…。」

やはりイベントの類だったようだ。ホッと胸を撫で下ろすと同時に目の前の二つの箱を睨む。

むううう…ッ！！

目を見開いてよく観察する。が、何も見えてこない。当たり前だが。

悩み処だな…。

貴史には悪いが、しばらく待ってもらう事になりそうだ。

いや、アイツも今頃は箱と睨めっこの真っ最中か。

俺は、もう一度それらをよく見るために、ピエロに向かって一歩踏み出す。と、

コッ…。

何か硬いモノが右足の爪先に当たった。

「?」

何も無いようだが…?

もう一度右足をツンツンと前に出す。

コッコッ、

やっぱり何かある。

しゃがみこんで足のあった位置を目を凝らして探す。

はたして 何も無いように見えた足元には、暗闇に同化していた“3つ目の箱”があった。

透明な箱、硝子に似た硬質な素材でできているようだ。

「これでもいいですか?」

拾い上げたそれを振って見せる。



「本当二、良インダネ？」

3つを見比べる。元から差し出されていた2つと下に転がっていた透明な箱。

勿論、生粋のゲーマーの彼がどの選択をするかなんて決まっている。

「ええ。」

「ソウカイ…。マ、頑張リナ。」

辺りが眩い光に包まれていく中、ピエロがニヤリと笑った、ように見えた。

気が付くとそこは野原だった。

辺りを見渡すと、他にも寝起きのように突っ立ったままのプレイヤーが数名。

どうやら無事に始まったらしい。

視線を落とすと服装もジャージからボロい服 版の時と同じ

初期装備になっている。

もう一つ気になるのは外見だが、よく考えてみると、確認の必要性が無い事に気付いた。

TGOではよりリアリティを追求するため、ゲーム開始前にプレイヤーの、顔も含めた身体情報を予めVR機器のハードの方へ入力している。それを採用している。

そこまで確認したところでまたしても視界が暗転した。しかし今回は 版で経験済みのチュートリアルが開始したのだと解っていたため先程のように驚いたりはいしない。

目の前で丁寧に解説されている既知の情報をスキップで飛ばし読みする。

この辺に性格が表れると言うが本当らしい。熱心に聞いているプレイヤーとスキップを連打するプレイヤーの2つに別れている。と言っても後者の数は圧倒的に少なかった。

「おつ、貴史いるじゃん。」

少し離れた位置で予想通りチュートリアルを受けていた。

昔から説明書を読み込んでからゲームに取りかかるアイツの性格のせいで何度かケンカになった事さえあった。

と言っても、もう何年も昔の話だ。俺だっていつまでもガキのままじゃない。とりあえずチュートリアルが終わるまでの間、システムウィンドウを開いてステータスやら初期アイテムやらを確認して待つことにした。

まあ、確認と言っても初期ステータス位しか見るものないんだけどね。ほら、アイテム欄はこの通り空なん？

何かが右隅にひっそりと収納されている。サイコロ状の透明な箱さつき貰ったアレだ。

調べてみるか。

しかし、ちょうどチュートリアルを終えた貴史の呼ぶ声に遮られる形となった。

なに、調べるのは後回しでも問題無い。それより今はMob狩りが最優先事項だ。今日中にLv5まで上げておきたい。

話し合いの結果、プレイヤーで飽和状態の草原を離れて少し難易度の高い森の方へ場所を移す事にした。

「それじゃあ俺がM o bのタゲ目標とるからメイトは背後に回って攻撃してくれ。」

「了解、バリー。」

バリーは貴史、そしてメイトは俺のT G O内でのネームだ。  
バリーは昔いたスゲー野球選手から採ったものらしく、オンラインゲームではときどきこの名を用いている。

俺の方は“ナイト騎士に成りきれない”というブラックジョーク的なものだ。何となくしつくり来たため使っているだけで深い意味や拘りは無い。

おっと、早速「ポルト」のお出ました。

すくさまタゲをとったバリーが俺と向かい合うように移動、ちょうど敵がこちらに背を向ける形となる。

『いいか、L v 1の俺達がL v 4のM o bと真っ正面から勝負を仕掛ければ苦戦を強いられるだろう？だから殆どのプレイヤーはしばらく手を出さないはずだ。』

数分前に聞いた言葉を思い出す。

『そこでだ、真正面からじゃなくて背後から狙えば良い。』

コボルトの背を短剣で一閃。  
甲高い悲鳴を上げてこちらを睨む。作戦通りだ。

その隙に距離を詰めていたバリーがコボルトに斬りかかる。  
一撃、二撃、三撃と放たれた攻撃はコボルトのHPを全て奪い去った。

無数のポリゴンとなって消えたのを確認して二人はハイタッチを交わした。

狩りを始めてから三時間。リアルタイムで進行しているTGO内も現実同様日没寸前となっていた。  
他のプレイヤーを見かけたのはつい30分程前の出来事で、それまではまさに独占状態だったため、予想以上の成果を上げることが出来た。

「今日はこんなモンだな。」

Lv8になったバリーが、レベルアップを知らせるファンファーレの鳴る中、満足気に頷いた。

「そうだな、それじゃあ街でドロップ品の換金でもして落ちるか。」

「ついでに武器も見ようぜ?」

「だな、さすがに短剣一本じゃな。」

「このみすばらしい服もなんとかしたいし。これじゃまるでコジキだ。」

ワハハハと笑いながら街を目指す俺達。

そう、その時俺達はまだ知らなかったのだ。これから起こる出来事を、自分達の運命を。

《現在》

メイト           LV 8

バリィ           LV 8

？

「結構人いるな。」

日はすっかり落ち、辺りも暗くなっているにもかかわらず街はプレイヤーで賑わっていた。

フィールドへと繋がる街の大通りは人々の活気で満ちており、テスト時はほぼ皆無だった生産職の職人プレイヤーの姿もチラホラと見受けられる。

あ、あの食材見た事ないな。実装版の新アイテムかな？おつ  
アックス  
！！あの斧カッター！！値段は……って三万！？あの職人正気か！？

「メイト、余所見してるとぶつか」

ドンッ

「きゃっ！！」「おつと、」

『すみません』と言う直前、けたたましいアラーム音が街に響き渡る。

「え、何、警告？？？」  
WARNING

突然目の前に表示された赤色の警告文に目を白黒させる。

警告文は重大なマナー違反などを犯した時に現れる。

故意にならともかく、両者不注意でのアクセシビリティ、それもぶつかっただけで表示されるなんてまず有り得ない事だ。

因みに、TGO内における違反行為の処罰は全てこのゲームのGMであるAIの裁量で決まる。例外として他プレイヤーへの違反行為を行った場合は処罰の有無のみ被害者であるプレイヤーに決定権が託される。

流星にこの騒ぎで周りも気付いたらしい。野次馬が集まり始めている。

冤罪なのだから別に気にする必要は無いのだが。

ほら、彼女だってニツコリ微笑みかけて

“通報” ボタンを押した。

「ちよっ!？」

『なんで!？』と詰め寄る前に景色が薄くなつて行く “強制転送” だ。

視界が完全にホワイトアウトする瞬間、俺は見た。

信じられないといった表情を浮かべたバリーが憤然として彼女に詰め寄ったのを。

呆然としたまま俺を見る彼女を。それはまるで重大なミスでも犯したかのような目だった。

「参ったな…。」

ここは牢獄の中。

迷惑行為を働くような集団のためのものであるのだが、実装版開始からもの数時間で十名弱が御用となっていた。

俺もその中の一人だが。

まさか自分がイエロー（マナー違反者のプレイヤー名の色が一定時間黄色に変色する事からそう呼ばれる。）になるとは……。

確か、プレイヤー間のトラブルは一律一週間の投獄ペナルティが課せられる。

『快適にプレイしていただくために』という企業側の配慮が今は憎い。

唯一、冤罪を晴らせばここからおさらば出来るわけだが、冤罪を証明するには少々厄介で、先程ぶつかった女性の力が必要だ。

更に言うところの牢獄、M o b が出現するフィールドの中に存在する。流石に檻の中にまでは入って来ないため急ぐ必要は無いが、彼らがここにたどり着くには最低でも一度はM o b とエンカウントする事になるはずだ。この周辺にはL v 5以上のM o b がウヨウヨいるためたどり着くのは困難だ。

特に夜は攻撃的なモンスターが多く、L v 10にも満たないプレイヤーがたどり着ける筈がない。

スタートダッシュを切った自分でさえL v 8の今、L v 10を超えるプレイヤーが果たして何人居ることやら……。

居るならば、そいつは間違いなく現時点でトッププレイヤーの一人だ。

「バリー、頼んだぞ……。」

唯一の頼みの綱である友人を名を呟くと、ウィンドウを開いた。時刻は20時を過ぎている。予定時間を完全にオーバーしていた。きっと今頃は夕飯を食べに来ない息子を心配した母親が二階に上がつて来ている事だろう。

早く戻らないと『夕飯抜き!!』なんて事も……。



昼もバリー貴史との話に夢中でろくに弁当に手をつけてないってのに……ッ……!

バリーには悪いが先に落ちよう。  
どうせ何も出来ないわけだし。

俺は《フレンドリスト》の一番上に表示されている《バリー》の文字をタッチすると『今日は先に落ちる、スマン……!』と書いたメールを送った。

さて、落ちるか。

ウィンドウの左端下、《ログアウト》の部分をクリックしようとして

「あれ?」

《ログアウト》ボタンが無い。

「あのっ……!」

「あん?何だ、兄ちゃん、改造データなら売ねえぞ?GMにそのテのモンは押収されちゃったからな」

「いや、そんなんじゃ無くてですね、確認したい事がありました。」

「確認だあ!？」

面倒くさいといった様子で顔を顰<sup>しか</sup>める。その表情が強面の彼の顔をより一層恐ろしいものになっている。

<sup>現実</sup>リアルなら関わり合いになりたくないタイプのプレイヤーだが、緊急事態だと割り切って会話を続ける。

「ウィンドウのログアウト部分を見てもらえませんか？」

「ウィンドウだあ？何なんだよ……たくよお。」

渋々、といった感じでウィンドウを開いた。（他プレイヤーのウィンドウは見えない仕様なのだが、手を宙にかざすというウィンドウを開く時の動作から解った。）

しかし、視線が左に動いた瞬間、表情が一変した。

「ログアウトボタンが……消えてやがる…っ!?!どどういう事だ!？」

バツとこちらを睨み付ける男に応える代わり、天を仰いだ。

マジかよ…ッ!!

『すぐにでもGMにメールを』と、抗議のメールをうち始めた時だった。

“それ”が漆黒に染まった夜空に現れたのは。

「何だよアレ……？」

空より深い闇を纏ったそれは圧倒的な存在感で、暴力的とさえ呼べるものだった。

「……………！！！」

その存在に、呑まれていた彼を呼び戻したのは硬質な機械音。

『グランドクエストを受注しました。』

メッセージ欄の文字に誘導されるように《クエスト一覧》を開くと確かに受注されている。

~~~~~

くグランドクエストく

十の国の十の層、全ての門を開きし時、真の門は開かれる。  
門を開くは英雄の手。

ゆめゆめ忘れる事勿れ。

行く手を阻むは一人の門番、避けては通れぬ定めなり。  
ゆめゆめ忘れる事勿れ。

命絶たれしその時に、魂は皆囚われる。  
真の門が開きしその時に、全ての魂は解放たれん。

く大予言者カッサンドラ最後の予言く

くくくくくくくくくくく

なるほど、

「具体的な指示…なくね？」

ていうか解り辛いな、オイ！！

「英雄…つてのは俺達の事か？門…はアレだから、門番はボスモンスターか。」

時の記憶を辿って推理を始める。

「十の国、十の層はそのままの意味として……真の門つてのは…？」

まだ層があるつてのか？厄介な。

「兄ちゃん、バカか？」

先程の柄の悪いオッサンが絡んできた。

「真の門つてのはだ、このゲーム自体、つつうこつた。」

「オッサン……天才なのか！？」

人は見かけによらないと言っが、本当だな！！

「ハッハッハ！！ちょっと考えりや誰にでも解るさ、んな事。」

口ではそう言っているが、先程までの仏頂面が満面の笑みになっている辺り、どうやらまんざらでも無いようだ。

すっかり機嫌を良くしたオツサン（ダンパと名乗った。プレイヤー名は表示されているから既に解っていたが。）は残りの解説もしてくれた。

「この“魂は囚われる”ってところ、ここだ。これは“死んだらゲーム終了まで復活出来ねえ”って意味だ。ま、死ぬよりはマシだろうがな。」

「へえ…てつきりデスゲームってやつかとはっかり…。」

「あゝ、一応デスゲームではあるな。」

「どういう事？」

「いいか？“魂が開放される”のはいつだ？」

「ゲームクリアした時。」

「じゃあ、もしもだ。」

「？」

「全員が死んで、捕らわれの身になっちまったら…どうなるよ？」

「そりゃあ…。」

誰も復活出来ないから……っ!?

「一生閉じ込められたまま!？」

「そうなるな、」

「デスゲーム…。」

漫画やライトノベルで何度も読んだのを思い出した。

主人公が活躍する様子を羨望の目で見ていた事も。

これはチャンスかもしれない。

俺が、皆を救う。英雄になるチャンスかもしれない。しかし…。

「一週間のペナルティ…。」

このままでは、かなりの差をつけられる事になるだろう。

いくら テスターとは言ってもすぐには追い付けないだろう。

それに情報だ。

なんと言っても情報は武器になる。

しかし、殆どの行動を制限されている牢獄内ではプレイヤー間で行われる情報交換のスレッドのアクセス権限が無いため、浦島状態に陥る事は必至だ。

重くのしかかるアドバンテージ。

「……拙くね？」

トップどころか中堅プレイヤーになるまでにどれだけ時間かかるんだよっ！？

「ま、やるしかねえだろ。」

やるしかない。

「……そうだな、やるしかねえよな……よしッ!!」

両頬を叩いて喝を入れる。

「その意気だぜ、メイト。」

鼻息も荒く意気込む彼をニヒルな笑みを浮かべて見ているダンパだった。

牢獄で過ごす事7日間、晴れて懲役期間を終えて街に転送された俺は、時からの行き付けの、NPC経営の酒場でアクセス権が回復したスレッドを貪るように片っ端から見ていた。

まず気になるのは現在の攻略進行度だが、なんと5層まで攻略済みらしい。

時は一週間かけて3層にたどり着くのがやっとだった事を考えると脅威的なスピードだ。

そして驚くべきはボスモンスターの攻略人数。

その数、たったの8名。

次層へと繋ぐ門<sup>ゲート</sup>。その開門者の名を記す石碑が門の横にあった事がそれを証明している。らしい。

8人であの門番達を……？

正直、俄には信じがたい話だ。

デスゲームと化した今、8人でボスに挑む剛胆さにも呆れかえるばかりだが、何よりもその実力はゲームバランスを崩壊させんばかりだ。

「その8人が仲間割れしてるのを見たあ？嘘くさ……。」

『方向性の違いによる解散』

つて、歌手グループかよッ！！

『ギルド分裂か？』

『ギルドリーダーとサブリーダーが新ギルド旗揚げ？』

『知り合いがギルド加入を打診された』など、眉唾モノな書き込みが多数。

一通り目を通した俺は、注文してあったミルクの残りを一気に飲み干すと代金3ツーカーを払うためウィンドウのアイテム欄を開く。

「あゝ…そっいや換金まだだったな。」

アイテム欄に収納されたままのドロップ品を何となく確認していると、

「これは……？」

アイテム欄の左端に表示されたそれは、初日見た透明の箱で



はなかった。

「sole ability “ファントム”」

これが俺の運命を大きく変える事になるうとは  
なかった。

俺はまだ知ら

そつえばバリーは？

《現在》

メイト

LV8

？

「何で 《アビリティアイテム》が……？」

アビリティアイテム      《アビリティ》と呼ばれる技<sup>スキル</sup>を修得する  
のに必要なアイテムの事だ。

基本的に高難易度のクエスト報酬であつたり、ポピュラーな物ならばNPCの経営する店で大金を費やす事で購入出来る物であるそれは、駆け出しの初心者が簡単に手に入れられる代物では無い。

「コストは      30!？」

アビリティにはコストと呼ばれる物が存在する。

コストとは簡単に言えば制限だ。

プレイヤーはレベルに応じたコストを持っており、スキルを修得する際に消費する。

一般的に高コストであるほど性能が良い。

初期で入手できるアビリティのコストは1か2、よくて3といったところだ。

時でもコスト5を超えるアビリティは見付からなかった。

それがどうだ、目の前にはコスト30のアビリティ。

間違いなく上級アビリティにカテゴリされるものだ。

初期段階でのプレイヤーの所持コストは20。Lv5毎にコストは所持コストが5増えるのでLv10到達時に全コストを払って修得出来る計算だ。

因みにアビリティアイテムは修得するまで効果は解らない上に使いきりであるため、やり直しも出来ない。

『アビリティ修得に必要なのは金ではない。 勇気だ。』と言われる最たる所以だ。

「……ま、急ぐ事もないよな？」

かくいう俺もその一人だったりする。

べ、別に怖じ気づいたわけじゃねーし！！

慎重さも必要だと思ったただけだし！！

とにかく！！まずはバリーと落ち合う事が最優先事項だ、うん。

俺はバリーにその旨を伝えるメールを送る事にした。

なに、心配性なアイツの事だ。すぐに返信が

返って来なかった。三日経ってるんですケド…。

勿論、中堅プレイヤーとして頑張るのは解らんでもない。

もしかしたら本当に“噂の10人”の誰かがバリーを勧誘していても不思議ではないとも思うし、忙しいとしても責められる事じゃないしな。

でも、三日間もメール無視する程の事って何ですか！？

待つてる間ずっとレベル上げしてたらいつの間にかLvも14にな  
つちやったし、3層まで上がって来ちゃったし……グスン。

「来るのはダンパさんからの裏情報ばっかだし……。ありがたいけど  
さ……。ん、待てよ？」

ダンパさんにバリーの情報提供してもらえば良くな？

「何で早く気付かなかったかなあ？      これで良し！！」

さあてと、それじゃあバリーを驚かせる用意でもしますか！！

## 第7層 《ネルバイン》

渴れ果てた大地に降り立った5人のプレイヤー！。

風格漂う彼らには共通点は見当たらない。武器、服の色、性格、容  
姿、どれをとってみてもカブることはない。

白のローブを羽織っている事以外は。

その後ろを十余名のプレイヤーの列が続いている。彼らの羽織るロ  
ーブは白一色で染まっている。

「確かに……“脱落者”はいないようですが……。」

「だから言ったじゃん、コイツらも戦力になるってさあゝ。」

「ギルメンいないの、後はお前だけだぜ、バリー？まさか、まだ仲間置いて来た事を後悔しているのか？もう過ぎた事だろう？」

「関係無いですよ……昔とか、今とか。」

「てゆくかも脱落してんじゃないのおく？バリたんの知り合いさあ？」

「おい、レイナー!!」

「いえ、良いんです、ジャイロックさん。気にしてませんから、」

「しかしだな、バリー!!」

「とにかく落ち着いてください、らしくないですよ？」

「……………すまない、つい熱くなってしまった。」

頭を下げる。背丈が二メートル近くあるため、視線が同じ高さになる。

「君の友はまだ脱落していないんだな？」

「ええ……そのようです。この前メールが来ました。」

「そうか。」

顔上げる。

「大切にな、」

ポン、と大きな手を肩に乗せた。

「はい。」

彼の背中を見送ると、背を向けて歩き出す。

目指すは第3層。

次のボス戦には参加出来ないかも知れないが、彼らなら自分が居なくても大丈夫だろう。

「さて、メイトのヤツをビックリさせてやるかな。　。」

「ダンパさん、それ本当!？」

第3層の街の中心部、露店を開いている強面のプレイヤーに話しかけるメイトの姿を遠巻きに見守る人々。

本人は『もう馴れちまったよ。』と口では言っているものの、普段よりも虫の居所が悪いようで、どこかトゲトゲしさを感じる。

「だから何度も言わせんな。いいか、バリーってのがお前さんの連れなら、そいつは今トッププレイヤーの中の一人、“白騎士バリー”として絶賛活・躍・中だ!！」

「バリーが……あの、噂の一人だって……!？」

「にしてもまさかなあ……あの《軌跡》の一人と知り合いとはな……」。

なあ、良ければ」

《軌跡》は今は解散してしまった彼らのギルド名だ。

「情報なら売らないですよ、」

「チエッ！！堅いやツだなあ……。」

「俺のせいでアイツがPKにでもあつたらと思うと……。」

「トッププレイヤーを誰がPK出来るんだっつーのは考え無かったのか？」

「強いつていつても、数には勝てない。だろ？」

「お前さん、バカなのかどうなのかハッキリして欲しいところだ……。扱いにくいっいたらありやしねえぜ……。」

短く嘆息する。

「死なない程度にバカだよ。」

立ち上がると同時、100ツーカー硬貨を指先で弾いた。

宙を舞う金をキャッチしようと目で追うダンパに背を向けて歩き出した。

目的地は第4層 《リリナーバ》、森を通り抜けるのに三時間、今からだとだいたい昼過ぎになるか。

能力アビリティの効果を試すのにもちょうど良い。

親友との再会か、はたまた強力な能力を得た事によるものか、彼は浮かれているようだった。

第4層 《リリナーバ》、全ての家屋が藁葺き屋根という街の光景に『どこの昔話だよッ！』と突っ込んだ思い出の（？）土地にバリーが到着したのは午後一時。

約束の時間をピッタリだが、予想していた通り、メイトの姿はない。遅刻魔

どうせその辺で路草でもくってるんだろうな…。

Mobの湧かない安全地帯の原っぱに寝転がって暢気に待つことにした。

メイトとの対人術その1、『心配しない事。』

一方その頃、当人かというと…

「昼に 強化型 ネオMobだと!？」

《ネオモス》 虫型Mob 《モス》の強化型だ。Lvは17。  
イモムシに似た外形で正直、気持ち悪い。



斬っても変な液とか出ないだけマシか…。

片手短剣<sup>ダガー</sup>を両手に一本ずつ。“ツインダガー”と呼ばれるスタイルだ。

手数の多さと多彩な技で相手を翻弄する

。

クリティカルヒットが出やすいのも特徴の1つだ。

難点は攻撃範囲<sup>レンジ</sup>の短さ。

そのためか、あまり人気が無いようだ。

『ソロのダガー使い発見www』というスレを見た事があるが…酷いもんだったよ、ああ…。

感傷にふけりながらもネオモスの突進を避ける。(突進というより転がるに近いが、どうでも良い事だ。)

さて…と、一気にカタをつけるか。

「s o l e   a b i l i t y      《ファントム》」

スツと、何かが体を包み込むのを感じ取る。

こちらを振り返ったMobが、キョロキョロと辺りを見回し始めた。

よし、上手くいったな……。

これが、アビリティ 《ファントム》の能力の一つ、“透明化”だ。

《ファントム》は“隠蔽スキル”と“索敵スキル”をMax値まで引き上げる能力で、短剣の弱点である攻撃範囲の狭さを補って余りある超級スキルだった。

透明化の時間は短いものの、発動制限が無いため問題は無い。何度でも透明化すればよいだけの話だ。

水泳でいう息継ぎの回数が多い、といったところか。

ゆっくりと背後から迫る。が、気付いていないようだ。

森の奥へと戻って行く敵の背中を斬りつける。赤いエフェクト、クリティカルヒットだ。

突然のダメージに混乱したネオモスは、最早メイトの敵では無かった。

「大遅刻だ……………」

待ち合わせの場所に着いた時には午後4時をまわっていた。

調子に乗って暴れまわったのが理由だろうな。おかげでLv18だよ！！

うん、解ってる。早くバリーの所に行って土下座しないといけない事くらい…。トッププレイヤーから命狙われるって、洒落にもなりませんからね、ハイ。

ってなわけで、待ち合わせの広場に向かったわけだが、

誰もいませんでした。

代わりに素敵なメールが一件。

~~~~~

今日は二時間待っても会えなくて残念だけど、次は会える事を信じて楽しみにしてるから。

あ、ちなみに今Lv32だから。

脅かそうとして、間違って安全圏外で攻撃しても怒らないでくれよ  
(笑)

それじゃあ、バトル楽しみにしてるから。

~~~~~

もう隠す気もないみたいですね、ハハハ…。

今日は徹夜でレベリングしよっと……。

《現在》

メイト      Lv18

？

バリーからの恐怖のPK予告メールから1週間が経った。

正直、あそこまでレベル差があるとは思ってもみなかった。

Lv32って、まだ10層も攻略してないんだぜ！？

Lv200が上限って言ってもいくら何でも…なあ？

だからってわけじゃないんだが、この1週間、俺はレベリングに徹したわけだ。

その成果だが、フッフ…見よ！！Lv24の輝きを！！

わざわざ8層まで行って山籠りした甲斐があったというものだ。うんうん。

さて、1週間も情報を断つとすっかり浦島状態だ。

街に行って見るか、うん。

食糧も尽きたし、換金と武器修理もしなきゃな。

## 第8層 《マルコー》

山々が連なって形成されたその層は飛行能力を持つMobが出現する。

時では結構苦勞させられたものだ。

まあ、強力スキルを携えたLv24の敵じゃなかったがな、ハッハッハ！！

おっと、いけない。話が逸れてしまった。

え〜と……そうだ、街だ、そう、街。

この街は見つけるのに苦労させられた。何時間も歩き回ったのに見つからないぐらいだから、相当な苦労だ。

『さぞかし皆も苦労したんだろうな〜。』とか思ったんだが…

スレッド見たら一発でした。

『第8層、街までのナビゲート』だってさ。入口から街までのルートが懇切丁寧に書かれててまあスゴい！！

出来れば数日前に知りたかったぜ、ブラザー！！

あ、スレ主は女性か。まあいいや。

それと、どうやら第10層攻略だが手詰まりらしい。

噂ではとんでもなく強いんだとか。

今までの比じゃないらしい。

『次国への門』だからと言うのが有力説だ。

この世界は十の国に分かれている。

計算通りなら今回が国と国を繋ぐ門、次の国への門、『次国への門』というわけだ。

なんにせよ、中堅プレイヤーの俺には縁遠い話だが。ん？バリーを

助けないのかだって？

俺だって助けてやりたいさ、そりゃあな。親友なんだから。

でもな、これはデスゲームだ。

死んだら終わり、即終了だ。

中途半端な力を付けたところで最前線には立てない、資格も無い。

だからこそそのレベリングだ。

とりあえず、最低限の力は身に付けた。

次のステップに移ろうと思う。

“ボス戦の雰囲気慣れる事”

ダンパさんに指摘されるまで全く気付かなかったのだが、俺にはボス戦の経験が無い。

そこで、クエストの中ボス戦に挑む事にした。

“TGO”には“グランドクエスト”以外にも多数のクエストが存在する。

モンスタードロップの採取、討伐、交換、etc.

その数は数え上げたらキリが無い程だ。そして、今回挑む中ボス討伐は、グランドクエストたる門番の討伐に次ぐ難易度と言われる上級クエストだ。

当然の如く、一人用クエストではない。

これは数少ないギルド用クエストなのだ。

ソロプレイヤーである俺は、“同志”を募らないといけない。

『信頼出来る仲間を見付けるのも強くなるって事よ、どんな化け物

だって一人じゃ限界がある。中堅プレイヤーなら尚更だ。』というのはダンパの言葉だ。

情報屋を営む傍ら、自らの命を守るために身に付けた両手斧捌きは攻略組顔負けだ。

出来る事なら彼にも手伝ってもらいたかったのだが、彼は《チップパチヨップス》という中堅プレイヤー内では名の知れたギルドのリーダーだ。

ギルドリーダーがギルドを脱退する事は出来ないため（仮に、ギルドリーダーが脱退すると、ギルドそのものが消滅してしまうシステムだからだ。）自力でなんとかするしかない。

頼る宛などあるはずもなく、結局ダンパさんのアドバイス通り、酒場に行く事にした。

カランカランと扉に取り付けられた鈴の音が店内の喧騒に下記消された。

ギルドメンバー募集欄があるって言ってたけど……アレか。

薄暗い店内で淡く輝くホログラム

ビッシリと書き込まれた募集要項や条件に目を通す。

本の活字みたいで目が痛くなりそうだ。

「見ない顔だな、新入りか？」

中腰のまま振り返ると三人組の姿が目に入った。

先頭の、話しかけてきた男がどうやらギルドリーダーらしい。

頭上に表示されたプレイヤー名の横に王冠のマークがついている。

という事は後ろの二人は彼のギルドのメンバーということだろうか、人懐っこさを感じさせる笑みを浮かべる青年と二人の陰からこちらを伺う眼鏡の少女も、自分と同年代だろう。

「前衛を探してるんだが、どうだ？」

願っても無いチャンスだ。

今すぐにでもOKしたいところだが、ここは勿体ぶった態度を見せるのが一番だ　ダンパ曰く『舐められたら負けだ、取り分も減らされちまう事だつて無いとは言い切れねえからよ!!』との事。

「詳しく聞かせてもらおうか？」

ちょうど空いていた四人掛けテーブルに腰を下ろすと三人もそれに倣った。

「自己紹介がまだだったな、俺はバーク、こっちのがマイルで、リザだ。ま、上に表示されてんだけどな、」

笑顔の青年、眼鏡つ子を順に指した後、視線を真上に向ける。

「メイトだ、こちらこそよろしく。」

『よろしく!!』と、威勢の良いマイルの挨拶とは対照的にリザの挨拶は会釈だけに留まった。

「で、メイトは前衛なんだよな？何使ってるんだ？片手剣か？両手



剣？斧とか？」

ズイツと顔を寄せる。

まるで少年のような、純粋な瞳。

隣に座っている二人もジツと言葉を待っている。

「ツ…ツインダガー…。」

思わず口ごもる。

両手短剣は人気が無いというスレを思い出しての事だ。

尻すばみになってしまったため、『なんて？』と、首をかしげている。

「両手短剣、だけど。」

つまりながらも伝える。

きつと、『短剣は無えなあwww』と一笑に臥して去ってしまうだろう。

そう覚悟したのだが、

「ふーん、珍しいな。で、熟練度はどんなもん？武器<sup>マッチレート</sup>適正率はB以上だと」

「待った待った、」

「なんだよ？まさか、適正率C以下なのか！？そりややめた方がいいぜ、メイト。適正率低いと武器の性能引き出しきれないからな、」

「そうじゃなくて!!！」

ガタッ！！と音をたてて席を立つ。  
驚いた様子で見上げる三つ顔。ポカーンという擬音がピッタリの表情だ。

「短剣だぞ！？スレで叩かれまくりの、短剣使いだぞ！？」

つい、声を張り上げてしまった。

内容も内容だ、自分の首を絞めるような真似までして

「そうなのか？じゃあ問題ねえよ、前衛なんだし。ってか、早く教えるよ、この際熟練度だけでいいからさ？」

『そうだそうだ〜！！』と後ろの二人も口を　こんな風に尖らせてブーブーと言い出した。

「本当に、いいのか？」

「良いつて、そんだけのレベルに上げれるって事がメイトの強さの何よりの証だよ。それとも厭なのか…組むの…？」

「いやいや、全くッ！！」

ブンブンと勢いよく首を横に振る。

「よろしく頼むよ、」

それから四人で作戦会議を行った。

今回は中ボス討伐、と言っても第二層の、だ。

当初の予定の第三層の中ボスは石像のようなMobで、時代、見た目通りのあまりの堅さに十人がかりで一時間かかった事をメイトが進言すると、三人は手のひらを反したように意見を変えたのだ。

「だって、ウチのギルド、ダメージディーラーいないし…。」

口数の少なかったリザも警戒心を解いてくれたのか、徐々に発言するようになった。

「そつえば、皆は何を使ってるの？」

「銃！」「杖…」「盾剣」

「杖か、リザは何魔法が使えるんだ？」

「支援系と回復系なら…。」

『かなりの腕前だぜ！！あ、攻撃系は水属性以外はサッパリだけどなwww』と、バーク。

なるほどな…。

追いかけてこを始めた二人を横目に情報を整理する。

彼らが扱う3つの武器は全て後方支援や壁用バフの武器だ。  
ちなみに盾剣というのは片手剣と盾という事。

マイルは前衛だが、壁役でもあるため、中々攻撃に回れない。確かに、前衛が足りていない。

ダメージディーラー  
逆に言うと、強力な火力さえいれば、かなり上手く機能するはずだ。

「コレ、俺の武器適正と片手短剣の熟練度。」

途端に、走り回っていた二人が駆け寄る。

「武器適正S！？初めてみたよ！！」

マイルが目を見開いて驚いている。

「熟練度561つて、お前：無茶苦茶だな、本当。」

「攻略組レベルだね、完全に……。」

苦笑いするリザ、口元が引き攣っている

「時代から使ってるからね、適正にも加味されたのかも。熟練度は剣振ってれば上がるし。」

最初の1週間、牢獄に閉じ込められた俺はガムシヤラに短剣を振るっていた。

その後も早朝は剣を振るようにしていたのだから、中堅プレイヤーとは一線を画しているのは当然といえば当然。

「これなら二層の中ボスなんて余裕だな！！」

「ああ、この層のネオ系強化型Mobの方が強いぐらいだよ。」

実際に対峙したわけではないが、攻略スレの情報から考えるとそうだろう。というやや正確さに欠けたものだが、しかし今は士気を高めるのが最優先事項だ。

「それじゃあ経費の方だけど、移動には転送装置を使うとして…、  
ボーション回復薬とMP回復薬の費用は折半で良いかな？」

マイルの申し出に一同は一樣に頷いた。

「ボスドロップのユニークアイテムは取ったモン勝ちだ。あとで揉めないようにな。」

ユニークアイテムはボスなどがドロップする装備アイテムで、他の入手方法が無いのが特徴だ。その効果は様々だが、高い性能を持つ。発言者であるバークが一同を見回したが、これに対しても否を唱える者はいなかった。

「それじゃあ、今から30分後に転送装置前ワーフゲートに集合だ。それまでに各自準備を整えておくように。」

ゴホン、と咳払いをしつつ胸を張るバークを指差したりザが耳打ちする。

「本人はあれで威厳たっぷりのもりなんだよ。」

『むしろ逆効果だね？』という彼女の問いに対して俺は曖昧に笑うしかなかった。

武器耐久度も万全だ。

ワープゲート  
転送装置の設置されている中央広場までは五分もあれば着く。

「行くか。」

《現在》

メイト      L V 2 4

？

## 第二層 《イゴーニア》

常に空が赤い事さえ除けば中々素晴らしい場所だ。

不思議な色彩の空に倣ったかのように鮮やかな朱に染まった紅葉と時折吹く冷たい風が現実世界の秋を連想させる。

また、高所から見下ろすと本来ダンジョンたる森の中心部にあたる部分に街が鎮座しているのが解る。

街に二分された森は　いや、“大きな林”と形容する方が適切かもしれない。それらは小さなダンジョンで、今回彼らが向かうのはより小さい方、街の東に位置するダンジョンだ。

二つの森に生息するM o bのレベルはほぼ同程度、若干東の方が高いぐらいだ。

しかし、決定的な違いはダンジョンの最奥部、所謂ボス部屋だ。

西側は次の層に続く門を守る門番がいるため、他の部屋の三倍はあろうかという大きさであるのに対し、東側の中ボスが待ち構える部屋の大きさは通常の大きさと大差無い。

これは門番が複数のギルドを連結したレイドで挑む事を前提としている事、そして中ボスにはレイドでの挑戦不可というシステムに起因する。

デスゲームと成り果てたT G Oにおいて、会社側が設定した目安など全く当てにはならない。

『死者を一人も出さない』という暗黙の了解の下、導き出された安全マージンは

《階層の数字》 + 10 〃 《プレイヤーレベル》

であり、中ボスに関しては階層+15、門番に挑むなら階層+20のレベルが条件とさえ言われている。

メンバーが四人である事とパーティー構成、レベルを考慮すると、やはりこのダンジョン以外の選択肢は無いようだ。

俺としてはむしろ有り難い話だけだな。

“ボス戦の感覚を掴む”事が今回の目的であり、そのために連携プレイのいろはを学べる程度の余裕があるのは彼の望むところであるそれに、

そういえば、こうして誰かと“ゲームをする”のって、久しぶりだな…。よし!!

「それじゃあ、元気出して行こう!!」

「おいメイト、そんな急くなよ!!」

「足元見てないとトラップに　!!」

「うわッ!!矢が飛んで来た!？」

「先が思いやられるわね…。」

ポツリと溢れた不安はメイトの叫び声に掻き消された。



数分後、落ち着きを取り戻して一言。

「どうやら俺はこの森の神の逆鱗に触れてしまったようだ。すまない…皆…。」

「一人ではしゃいで低級トラップにかかってただけだろッ!？」

「メイト、ちょっとふざけ過ぎだよ?」

うわぁ…マイル、笑顔だけど青筋が…。

「メイト、おバカさんなの?」

「「リザ!」!」

二人が彼女を叱りつけた。まるで『本当の事言ったら傷付くだろうッ!』と言われているようだ。

しかし、不本意ではあるが非を認めるのが大人というもの。ここは頭を下げる事にしよう。

「いや、俺が悪かった。誰かところするのも久しぶりだったからさ…。それでもちよっと浮かれ過ぎたよ、ゴメン。」

頬を掻きながら苦笑する。

「…(ボツ!!)」

「？」

何故か顔を赤らめている。眼鏡の奥の栗色の瞳が忙しくキョロキョロと動いている。

「べ、別に解ればいいの……ほ、ほらっ、早く行くわよ!？」

「なあ、リザはなんで怒ってるんだ？」

先頭を歩き始めた彼女に聞かれないよう二人に訊ねてみたが、ただ無言で肘で小突くだけだった。

「なあ、皆。」

「ん？」

油断なく視線を左右へ走らせたまま応答する。

「変だと思わねえか？」

「何が？」

「こんな奥地まで来たのにまだMobとエンカウトしてないから

遭遇

よ、  
」

「……。」

「今にも集団で襲い掛かってくるんじゃないかな？なんて、  
」

その瞬間、いくつかの変化がもたらされた。

一つ目は空、この層に於いては決して訪れるはずの無い、闇。

二つ目は重圧、前方から圧倒的な“何か”が見下ろしているのを四人は感じ取った。

三つ目、“死”の足音。

「後ろに飛べええッ！！」

気付くと後方へと飛び退きながら大声で叫んでいた。

目の端で三人を捉える。全員間に合ったようだ。

数秒前まで彼らが立っていた場所には七本もの槍が突き刺さっていた。  
た。

まともに当たっていたらと考えると背筋が凍る。

まさか レッドギルド！？

突如現れた七つの影は槍を引き抜くところらに近付いてくる。

はたして      それらは人では無かった。

今は見えない空の色と同じ赤い眼、前進黒い体毛で覆われたそれは獣人型Mob 《レッドブル》。大きく突き出た二本の角は猪のそれに酷似している。

頭上に光るHPのバーの横にはモンスター名とレベルが表示されている。

平均でLv13。一見、大した事は無いように見える。が、しかし問題はそこでは無い。

「何でレッドブルには群れる習慣は無いはずじゃ…。」

そう。通常Mobは獣人型や亜人型などの人に近いモノ以外は群れを成す性質を持たない。

確かにレッドブルは獣人型にカテゴリされるが、群れを成す性質は無い。

しかし、唯一の例外がある。

「まさか、<sup>強化型</sup>ネオが……？」

「レッドブルのネオ！？聞いたこと無いぞ！？」

そう、レッドブルの強化型を見たという話は聞いた事が無い。

そもそも強化型の存在する固体の数は全体の三分の一にも満たないため、存在するかどうかも怪しいのだ。

だが、

「《ネオブル》……ッ！！」

上級アビリティ 《ファントム》によって 《索敵スキル》がMAXまで引き上げられた彼の目は、三メートルに迫る巨体の獣人モンスターが仁王立ちしている光景を映し出していた。

「リザ！！支援魔法をッ！！」  
エンチャント

「解ってる、ブレイブパワーッ！！」

既に杖を構えて魔方阵を待機させていた彼女が声を発すると、魔方阵が回転を始め、赤い光が四人を包み込む。筋力値ボーナスの魔法だ。

続いての魔法、“エアアーマー”はダメージを軽減する強化魔法。単体強化であるため、全体強化魔法より効果が高い。

青いエフェクトが一瞬視界を過るのを確認すると、メイトは全力で駆け出した。

後方、入口の方へと。

「スマンッ！！少し耐えてくれ！！」

「な、ななな、なっ！？」

三人が同時に口をパクパクし始めた。

『なんか金魚みたいwww』などと考えている場合では無い。

「信じるッ！！」

取り残していく三人にそれだけ告げると筋力にモノを言わせて大きく跳躍、飛ぶように木々の間を走る。

一刻でも早く戻りたいという気持ちを押さえ込みながら走り続ける。

仲間を助けたい。

だからこそ今は距離を取らなければならない。

相反する二つの思いを抱えながら、走る。

「クソッ!!」

二丁拳銃が火を吐く。両弾頭部に命中、クリティカル判定。残りはレッドブル四体と未だ沈黙を守るネオブルの計五体。

前衛のマイルが槍で牽制している。

ここからでは見えないが、この瞬間は彼の顔に笑顔は無いだろう。回復魔法の魔方陣を待機させながら背後に意識を向ける。しかし、何かがやって来る気配は感じられない。

「……………あんなヤツを信じた私がバカだった…………ツ!!」

強く唇を噛む。ピリツと痛みが奔る。

そうだ、忘れてはいけない。これは既に単なるお遊び<sup>ゲーム</sup>では無い、この痛みも、死も、現実なのだ。

知り合ったばかりの男とギルドを組む？

逃げ出した人間の都合の良い言い訳を信じる？

間抜けな自分が厭になる。

「バイヒール!!」

全体回復魔法、緑のエフェクトが一陣の風のように吹き抜ける。HPバーのゲージがMAXまで引き戻される。同じく、横に立つバークもHPは満タンだ。

しかし前衛で支えるマイルのHPは七割弱、やはり、この数を一人で支えるのは厳しいようだ。ネオブルが一切の動作を見せないのも気になる。

「リザ!!」

「え？」

頭上に、黒い点が、あった。

それはだんだんと大きくなって　　気付いた。あの点は一本の槍だ。

ネオブルが獰猛な笑みを浮かべていた。ゾッ!!と背中を冷たいモノが奔ると共に彼女は悟った。

ああ、死ぬんだ、私……。

二人が必死に叫んでいるのが見える。

それなのに、彼女の耳には何も届かない。

人は死の直前、時間を実際の何倍にも体感すると聞いた事があるが本当らしい、槍<sup>死</sup>がゆっくりと近付いて来るのが見える。

この時リザは、死を悟った大半の人間と同じく不思議と穏やかな気分だった。

ゆっくりと目を閉じ、死が訪れるその瞬間を待った。

お待たせ、

死が、彼女の肩を叩いたのだと直感した。  
優しい、男性の声。“アイツ”の声。

裏切られたのに、私ってばバカみたい…。

しかし　これが“死”というものなら、案外悪く無い。痛みも感じない。

意識だつてほら、こんなにもハッキリと　、

薄く瞼を開く。そこには、

呆然と立ち尽くす二人と、独りでに消滅していくレッドブルの姿があった。

「何、これ……。」

ネオブルが暴れ出した。

木のような太い二本の腕をガムシヤラに振り回している。

虫でも追い払うかのような動作、しかし背中から発する青白いエフ



エクトが確実にHPを削っていく。

何分間そうしていたのだろう。

ついに抵抗を止めたネオブルのHPバーは完全な白に染まっていた。パリンツ！という硝子が割れるような音と共に無数のポリゴンの粒子へと変化するのを見届けると、地面にへたり込んだ。

状況が掴めないまま、今更思い出したように自らの頭上に輝くHPバーを見上げる。

一ドットも減ってはいない。

それどころかレベルが上がっている。

「どういう事……！？」

ネオブルの大槍が迫るその時まではレベルアップの通知は無かった。つまり、レベルが上がったのはそれ以降という事になる。

だが、それは有り得ない。

TGO内でプレイヤーが経験値を手に入れる方法は次の三つに限られる。

- ・Mobを倒す、または他プレイヤーが倒したMobにダメージを与えていた時
- ・特定のクエスト報酬
- ・ギルドメンバーがMobを倒した時

あの時点で、残りの四体は無傷だった。自分が経験値を獲得するには残りの二人がトドメをさす以外に方法は

「もしかして、メイト……？」

そう。あの攻撃の正体がメイトによるものならば説明がつく。  
ただ一点、問題があるとすればそれは当の本人の姿が見当たらない  
事だ。

弓矢やバークのような銃を使えば遠距離からの狙撃も可能だが、昼  
間見た彼の遠距離系の武器適正は決して高くは無かった。  
マッテリート

アイテムを取り出すために開いたウィンドウには半径300メートル  
圏内のプレイヤーとMobの情報が映し出されていたが、彼の反  
応は無かったため、その可能性も低い。

それでもあの瞬間、確かに彼の声が聞こえたのだ。今でも耳から離  
れない、優しい声が。

「居るんでしょ？ねえ、」

応答はない。返ってくるのは風に揺られた木の葉の擦れる音だけ。

「　　そっか、」

違ったんだ。

やっぱりアレは、貴方じゃないんだね、メイト…。

「　　戻る。」

溢れ出しそうな涙を堪えて来た道に戻る。

嘘つきイ……！！

溢れ出す涙を拭う。

それでも止まらない涙が頬を、大地を濡らす。

「ごめんな、恐がらせて。」

ポンポン、と誰かの手が頭を撫でた　　気がした。

メイト　　！？

振り返る、しかし、そこには何も無い。

「リザーツ！！遅エゾーツ！！」

「　　ごめん、今行くーツ！！」

走り出す瞬間、一瞬だけ　　いや、きっと気のせいだ。

「　　今度会ったただじゃおかないんだから…ッ！！」

誰にも聴こえない小さな一言を残して、駆け出した。

言ったか……。

三人が去って行くのを見届けて、大きく息を吐いた。

結局また独りだが、昨日までと同じ。ただ戻っただけだ、彼らを救

えただけ良しでしょう。

先程の現象は勿論、怪奇現象やバグなどでは無い。彼の仕業だ。

アビリティ 《ファントム》、敵味方問わず欺く“幻想”の力。

隠蔽スキルをMAXまで引き上げられた彼の姿を捉える方法はただ一つ、視認する事。

ネオブルが動かなかったのは彼から視線を外さないため。

彼の持つ能力をどんな方法で察知したのかは解らないが、透明化を発動するための条件、“全員の目を逸らす”必要があった。

どうあっても視線を逸らす気は無いらしいと判断した彼は一度、戦線を離脱する事を決断したのであり、決して逃げたわけではない。

と言っても、説明する必要もするつもりも無い。

自分のせいでこれ以上誰かを危険にさらしたくは無い。

このまま恨まれ役を買った方がずっとマシだ。

「さて、それじゃあ中ボスでも見に行きますか、」

ギルド追放は加入から最低でも6時間は認可が降りない。つまり後三十分は余裕があるわけだ。

「あゝあ、四人で戦いたかったなあゝッ!!」

数分後には切れるだろう支援魔法の赤と青の光。今にも消えそうな淡い光が、突然強さを取り戻した。

強化魔法の継続。つまり、“術者が再び魔法を発動した証”。

まるで『お見通しだよ?』と言わんばかりだ。

「ハハッ。ありがと、リザ。」

そう独り言ちて、強く大地を蹴り上げる。  
森を駆け抜ける彼を包む二筋の光は、まるで誰かが寄り添っている  
かのようにだった。

《現在》

メイト      L V 2 5

？

「で、お前さんは憎まれ役を買って出たわけか。その三人を確実に守るために？」

ここは第六層 《ツートン》、ゲーム攻略を目指す中堅を支える生産職プレイヤーの聖地<sup>メッカ</sup> と言っても、常駐しているわけでは無い。来週までには殆どの人々がここを去るはずだ。

今も、ダンパのガラクタ もとい、雑貨店の隣でアクセサリーを売る女性プレイヤーが商売の合間を縫ってアイテムを纏めている。

「第二の国 か。」

このゲームは十の国から成る。  
一つの国に十の層。

現在は第十層の攻略が行われている。

これまでのペースから、攻略には三日もあれば充分だと思われていたが、どうやら一筋縄ではいかないようで、既に一週間が経った。

「何でも、“あの八人”が協力するとかしないとか、つてのが専らの噂だ。」

“あの八人”というのが誰を示すのかは言わずもがな。

「んで、今日は何だ？まさか世間話に。ってえわけじゃねえだろ？」  
昼間だと言うのにアイテム欄から酒を取り出して、一気にあおった。

『体に悪い』なんて言い分は通じない。『仮想空間の飲酒がか？ハッ！』と、一蹴されてからは何も言わない事にしている。この人には口じゃ敵わない。

「ちょっと見てもらいたいものがあつて。」

つい最近手に入れたアイテムを彼の前にそつと置いた。途端に目の色を変えてじつくりと観察し始めた。

その鋭い瞳は飲んだくれの酔っ払いのモノでは無く、情報屋ダンパの顔だ。

「メイト…こいつを何処で…？」

「第二層でね、ドロップ品だよ。」

「俺の記憶が正しけりやあ…あその中ボスのドロップは毛皮の帽子だったと思うが？筋力値＋8の。如何せん、見た目のせいで誰も使いやしねえって評判でよあ…裏で出回ってるぜ？」

「ああ、そっちじゃないんだ。これはネオブルのドロップだから。」

ピクッ、と彼の手が動きを止めた。なめ回すように見ていた彼はそつと緑のローブを置いてこちらを見つめた。

「ネオブルの、なのか？本当に…居たのか！？」

小声で迫る彼の目は真剣の色を帯びていた。周りになるべく悟られないよう、まるでダンパの店の品を漁っているかのように一番近くにあった紫色の薬草を手取る。

「大槍を持っていましたよ、投擲スキルも備えていましたし。」

「その情報買った、1000でどうだ？」

「ダンパさんにはお世話になってますし、いいですよお金は。」

「そうか、悪いな。」

ウィンドウから硬貨を引き出した金をしまった。

『儲け儲け』と顔に書いてある。情報のレートはサッパリだが、かなりの高値で売買されるのだろう。

「その代わりに一つ、いいですか？」

『ツートンってえと商売、商売ってえとツートンつつうイメージだが、実はもう一つ、良い狩り場が多いのでも知られてる。情報通の間で、だけどな。それで、この地図の×印の場所がそれだ。お前エにやるよ、メイト。遠慮すんな、俺あ覚えたからな。』

「ここを抜けた所か……。」

染みのついた紙切れをアイテム欄<sup>ストレージ</sup>へ放り込む。

これで1アイテム扱いだよ、納得いかないな……。



後で地図にマッピングしたら処分するか

ん？そうだ！！

メールを作成する。差し出し相手はリザ。

『今度会つたらただじゃおかないからねっ！！覚悟しなさいよ！！』  
というラブコールを先日受け取ったばかりだ。

マイルとバークを説得してくれたのも彼女らしい。俺がお尋ね者になっ  
ていないのはそのお陰だ。

そうでなければ今頃はスレッドで詳細な個人情報を晒されていたはずだ。

お礼とお詫びを兼ねて、というわけだ。我ながらナイスアイディア  
！！

早速俺は先日<sup>強迫メール</sup>の謝罪を兼ねたメールに手紙を添付して送信した。

メールにアイテムを添付出来る。ただ、送れるアイテムには制限がある。

まず、装備品の類は送信不可である。どうやら質量があまりにも大きい物は無理らしい。他にも、希少度の高いアイテムも送る事が出来ない。

これについては『万が一、間違えて添付してしまったとしても大丈夫なように』という明確な理由が存在する。念には念を、という事か。

そんな事を考えているうちにいつの間にか着いていたらしい。十名以上のプレイヤー達が時間を気にしながら並んでいる。

「最後尾ってここで合ってますか？」

アフロというなんとも斬新な髪型の男性に声をかけた。

「ああ、そうだけど。でも大丈夫なのか？」

俺の腰　　より正確には二本の短剣が鞘に納められているのを一瞥した。

この人もか。

ダンパがいつも恐がられている事にイライラしているのを見てきたわけだが、なるほど、確かにウンザリする。

「武器だけで実力は測れないと思うけどな。」

だから普段より挑戦的な口調になってしまった。

しかし、それが拙かった。

「ほお、言うねえ〜？」

アフロの男はニヤニヤと挑発的な笑みを浮かべた。見れば彼のギルメンと思しきプレイヤー七名が周りを囲んでいる。

「なら、その实力を見せてもらおうか。なあ、お前らも見たいよなあ？」

アフロの男　　ロットが周りに同意を求めると皆一様に頷いてみせた。

「て、わけだ。お手並み拝見といこうか？」

「一対一<sup>サシ</sup>で闘り合うのか？」

一歩、詰め寄る。

「いやいや、まさか」

彼の言葉を大仰な仕草で一笑に伏した。

「ここは一つ、M o b 狩りといこうや。」

「……分かった。」

えらく無難なチョイスだ。先程の反応からしてももう少しハードなものだと思ったのだが…。

「よし、それじゃあルールだが…戦闘時やM o b 遭遇時における妨害は禁止。」

『流石に死にたくはねえからな。』と、付け足した。

「勝利条件は何だ？」

『コイツ、勝つつもりでいやがるぜ？』という安い挑発を軽く受け流して訊ねる。

「討伐数で決めるとなると不正が生じる可能性が出てくるからな、特定のM o bを先に狩った方の勝ち、って事でどうだ？証拠はドロ

ツプ品の提示、問題無いな？」

「そのドロップ品を既に所持していたら勝負にならないと思うが？」

「そう言うと思ったぜ、でも大丈夫だ。今回のターゲットはこの  
ヌシ 《ガーゴイル》だからな。」

「ガーゴイルか……」

悪魔の姿をしたMobで、飛行能力と火属性魔法を使う。正直、一人では厳しい。尤も、一度引き受けたからには降りるつもりは毛頭無いが。

「勿論、俺らは持つちやいない。ほら、これでどうだ？」

ストレージ  
アイテム欄を可視状態にして見せる。確か、火属性魔法を強化する  
という物だったはずだ。 《ガーゴイルの火》、そう、それがドロ  
ップ品の名前だ。

もう一度見直して見るが、やはり彼らのストレージ内には無いよう  
だ。

あくまで公平に、と自らのストレージ内も見せようとしたが、『い  
い、いい、別に。ソロが持つてるはずねえよ。』と捨て台詞を吐き  
捨てて行ってしまった。

馬鹿にされようが構わない。実力を見せ付けてやれば良いのだから

と、思ったが……やはり腹が立つ。

「絶対勝つてやる…ッ!」

この時、彼はかつて無い程に燃えていた。

そう、これがデスゲームである事も忘れてしまう程に。

《現在》

メイト      L V 2 6

？

《ガーゴイル》が又シと呼ばれるのにはいくつか理由が存在する。

一つ目はその強さ故である。素早い動きと鋭く伸びた爪、そして火属性魔法。

遠近どちらにも対応する万能力マルチタイプの上に飛行能力も持つとなれば一介のソロプレイヤーが討伐出来るかどうか怪しい所だ。

二つ目は個体数だ。

この層においてガーゴイルが複数現れる事は無い。層全体で一体しかいないからだ。もしもガーゴイルが討伐された場合、半日後に再び湧出するまでは遭遇する可能性は無い。

現在、ガーゴイルが発見されたのはこの第6層のみ。まさしく、唯一又シの存在と呼ぶに相応しい存在なのだ。

他にも理由があるのだが、キリが無いので割愛する。

「フム……………」

今回は一対多の不平等極まりない勝負だ。

アフロ男の提示したルールに参加人数に関する制限や取り決めが無かった事からも容易に想像出来るし、仮にこちらが認めなかったとしても相手はルールを犯して複数人で挑む事は火を見るより明らかというものだ。

『むしろガーゴイルに一人で挑む方がどうかしてるよな、』と自嘲気味に苦笑し、不意に歩みを止める。  
無論怖じ気づいたわけではない。

「この辺りだな…。」

攻略スレから数少ないガーゴイルとの遭遇情報を集計し、導き出した場所だ。

ただし、虚偽の情報も混在しているため信用性にやや欠けるのが不安材料ではあるが。

しかし他に頼るものが無いのだから信じるより他無い。

「又<sup>mob</sup>シの方に探させる、か。」

『何だかあべこべだな。』と思いつつも空を見上げて待つ準備は万端である。

因みに今回は遭遇する事が目的なので当然“透明化”は封印している。

「動いた方が見つかり易いかな？」

ぐるぐると周辺を動き回る事にした。

ただ待つだけって、案外疲れるのな……。

遅刻魔メイトは生を受けて十六年目、ついにその事実を知った。

「まだか…。」

ウィンドウを開いて時間を確認し、愕然とする。なんとまだ三十分も経っていない。二時間は待ったと思ったのだが…。

「せめて姿さえ見えりやあな…。」

アビリティ 《ファントム》によって極限まで高められた索敵スキルで追うことも可能なのだがそれも今は使えない。

捜しに行こうかな？

既に歩き回るのも止め、腰を下ろしながらボンヤリと考えていた時だった。

地震？

微かだが確実に揺れている。

そしてなにより、長い。心なしか時をおう毎に揺れも強さを増している気がする。

「随分と長い地震だな　　って、」

ここ、ゲームの中だぞ！？

気付くが早いか弾かれたように立ち上がる。

「　　《ファントム》ッ！！」

体を冷たい何かが覆う感覚を確かめながら周囲に目を奔らせる。



石や木のようなオブジェクトとは違い、フィールドに干渉するためには莫大な力<sup>エネルギー</sup>が必要だ。

それこそ何十という郡勢が走り回るほどの力が　。

はたして、近くにあった木によじ登ると“それ”が目飛び込んで来た。

いや、“それら”の間違いか、

先程まで居た集団がMobの大群に追われていた。先頭を走るアフロ男の必死な表情からして突然の出来事だったのだろう、現在進行形で爆走中の彼らを見下ろして一言。

ヤベエ、ウケる（笑）

いや、助けるよ？助けるけど…もう少し楽しんでからでも間に合うみたいだし、な？

とは思いつつも、腰の短剣を引き抜いて身構える。走る敵を背後から攻撃するのは困難だ。狙うなら　頭部

Mobの最前列が差し掛かったところで飛び降りる。振り上げた短剣を爬虫類型Mob《リザードナイト》の見た目よりも硬質な頭部を両断する。

それには目もくれず続けざまに二撃、呆気なくポリゴンの塊となる。割合高度なAI<sup>知能</sup>を持っているのか、異変に気付き混乱を引き起こした。

まさか、知能が仇になるなんてな。

統制と勢いを失ったそれらを総て倒すのに長くはかからなかった。

さて、先程の騒動で既に競争相手が消えてしまい、続ける意味も無くなってしまった。

が、続行。

ここまで待つて帰れるかッ！！

この時彼は意固地になっていた。利益やリスクの事など頭から吹っ飛んでしまう程に。

《現在》

メイト    L V 2 6

？

## 第10層 《ウォーラ》

安息の地である街の広さは第1層 《トータス》のそれとは比べるべくも無いような、そんな場所。

それとは対照的に街からずっと北へ行くと一際大きな門が見える。第11層 つまりは“第二の国”への扉という意味合いも込められている今回の攻略も、今までと同じようにすぐに完了出来るものと高をくくっていたのだが。

「今日で十日目か、」

寝ぼけ眼で時間と日付を確認して嘆息する。

十日、それが彼の所属する攻略組ギルド 《白光》が足踏みしている日数。それは今までの異常なまでの攻略スピードからするとあまりにも長い時間といえる。

「今日こそ終わらせてやる」

その言葉を現実のモノとするべくあの条件で手を打ったのだ、失敗など許されない。

“もう一つの攻略組ギルド 《黒月》との共同戦線、それもボスドロップ品をこちらが入手した場合は無条件で譲渡する”などというふざけた条件を飲んだのだから。

「何にしてもあの化け物を倒すのが先だけだな、」

ギシギシと音をたてて、古い木製ベッドから起き上がる。

「の前に腹ごしらえか。」

身支度を整えると、空腹を訴える腹を擦りながら皆の待つ広間へと向かった。

「おー、バリー、おはよー。」「早くしないと全部食っちゃうぞー？」「ここ座れよ、ほら。」「ちよつとおく、バリーさんは私の隣に座るんだからあー！ね、そうだよね！？」

朝から騒々しい彼らこそが俺の所属するギルド 《白光》のメンバーだ。

と言っても普段はそれぞれが別行動を取っている。

《白光》はここに集う人がそれぞれに独立、旗揚げしたギルドを連結した時の呼称であり、同時に実質のNo.1を任せている彼今は目の前のパンケーキを夢中で貪っている ギルドの名である。

「おはようございます、皆さん。」

柔らかく微笑むと、黄色い声上がる。声の主はレイナ。今日もフリリのドレスのような服装、基調となる色は必ず白であるのも特徴だ。

その華奢な身体からは想像もつかないような馬鹿デカイ銃器を扱う。

かなりの筋力値を要求されるであろうそれを片手で平然と振り回しているのを始めの頃は啞然として見ていたものだった。

俺は彼女の隣へ座るとコップにミルクを注ぎ、大皿に盛られたサンドイッチを適当に選んで口に運ぶ。

鳥型Mob 《ドードー》の卵と

「この肉は……？」

豚肉のようだが、シャキシャキとした不思議な食感レタスのそれと似ている。

「《モス》の肉だ。」

「ジャイロツクさん。」

深みのある声と共に厨房から現れた筋骨隆々の大男。

これで盾と剣を持たせれば立派な戦士の出来上がり、といったところだが、彼の手には脱いだばかりであろう白い帽子が収まっていた。食事係を務めている彼の料理の腕前はプロ顔負けで、《料理スキル》の熟練度は早くも800に差しかかるほどだ。

本人は何も語ろうとはしないが、恐らく現実リアルの方でも料理人だったのではないかと考えている。というのもそれを臭わせる発言が時折彼の口から漏れるからだ。

「《モス》の肉ですか？」

確か、豚の背中に草が生えたような姿だったか。

肉料理は火を扱うため料理スキルを最低でも500を必要とするため現在のところ一握りの料理人のみが扱える代物ということになる。

バリーが初めて口にしたとしても何ら不思議な事では無い。

「何だか野菜で巻いた肉を食べてるみたいでとても美味しいです。」

皆も頷いている。

表情には一切の変化は見られないが、やはり嬉しかったようでサンドイッチを指差し、言った。

「モスの肉で作った、モスバーガーだ。」

「いや、アウトでしょ!？」

いち早く突っ込んだレイナの方へ向き直る。

「……何か問題でも？」

「問題大アリ」

「フム……スレッドには“モス食いてーッ!!”という熱い声が多数挙がっていたのだが……。」

本気で考え込み出した彼に皆苦笑を浮かべた。

朝食を採り終わると全員自室へと戻り、各々武器の最終点検とギルドメンバーの召集に取り掛かる。

朝食前に点検を終えたバリーは回復アイテムの確認を済ませると、一足先に集合場所である街の大広場へと向かう事にした。

数日前まで彼らが独占していたこの街にも頭一つ抜け出した“攻略組予備軍ギルド”や次層開放を待つ生産職プレイヤーが現れ始めている。

自分としては戦力が増えて良い兆候だと思っているが、裏を返せば『攻略がかなり停滞している事の証拠』でもある。

焦りが無い、と言えば嘘になる。

恐らくそれは他のメンバーも同じだ。そうでも無ければあんな条件を飲むはずが無い。

「　　つと、」

いつの間にか広場に着いていたようだ。

既に中央はフード付きの黒いコートの集団、《黒月》のメンバーで埋め尽くされている。

「おい、アンタ。」

不意に呼び止められる。二人組の男、一人は関取のような巨漢、もう一人は鼠のような男だ。

「……何か？」

「アンタ“白”の方だよな？」

「《白光》のメンバー、という意味ならその通りだが？」

「そうかい、アンタもねえ……。なあ、お前はどっ思うよ？」

鼠男が訊ねると、そこまで口を閉ざしていた巨漢の方が若干の間を置いて短く告げた。

「テスト、必要。」

『テスト？』と訊き返す前に鼠男が曲刀を鞘から引き抜いて突き付けた。

「3分、耐え抜いたら合格だ。」

それ以上の説明をする気は無いらしい。『決闘の申し込みです。』というメッセージが目線のやや下で表示される。

準備運動の手間が省けたな。

躊躇うこと無く“承諾”を押す。

“FIGHT!!”の文字が上空で大きく展開されると同時、鼠男は地面を蹴って突っ込んで来た。

中々の敏捷力だな。

降り下ろされる曲刀の太刀筋を見極めて回避する。

「課題は筋力値<sup>STR</sup>だな。」

鼠男の右手の甲を手刀で一閃。



手を離れた曲刀が宙を舞う。

「なッ！？」

刀が地面を転がる硬質な音が広場中に響き渡る。

「まだ時間あるけど、続ける？」

曲刀を拾い上げて、ニッコリと微笑む。

「い、いえッ！！」

『すみませんでしたあッ！！』と何度も頭を下げると、差し出された曲刀をひったくるようにして猛スピードで走って行ってしまった。巨漢の男が巨体を揺らして追いかける姿を見送っていると、依然として固まったままのギャラリーの中から拍手の音と共に聴き覚えのある声がある。

「また腕を上げたな、“白騎士バリー”」

見れば、女性プレイヤーだ。

艶やかな黒髪と病的なまでに白い肌、彫刻作品であるかのような完璧なプロポーションに美しい顔立ち。しかし、目が放つ光は強者のそれだ。

「スレイルさんこそ、いつの間に隠蔽スキルなんて上げてたんですか？」

『なあ、白騎士ってあの白騎士だよな…？』『それにスレイルさんが出てくるなんて……。』

ざわつき始めたギャラリーを一瞥するとスレイルは『付いてきたまえ』とだけ言う。と黒いコートをはためかせながらターンして群衆の方へと歩き出す。

すると、波が退いていくように道を開ける。モーセの十戒の“紅海の奇蹟”を思い出しながら彼の後を追った。

簡易テントの中へと通されたバリーは見た目よりも中の空間が広い事に気が付いた。

「腕の良い職人が居てね、知り合いに話を通してもらって作って貰った。オーダーメイド品だよ。」

ソファーに身体を埋めて足を組む。

「羨ましい限りですね。ウチなんか毎日経理がヒーコラ言ってますよ。」

溜め息をついてみせると彼はハッハッハ！と一頻り笑った後、尚も吹き出さんとする笑いを噛み殺して言った。

「経費の見直しをお薦めするよ、基本は人件費だね。        いや、今日の結果によっては見直す必要も無くなるわけだが        」

「そうですね        ですがそれは期待出来そうにありませんよ、」

「ほう?。」

鋭い眼光を放つ切れ長の目の端が僅かに動いた。

「あれだけ手を妬いている敵に脱落者を出す事無く勝てると　そう言う事かな?。」

「少なくとも我が陣営からは、ですが。」

互いに睨み合う。が、フレイルは『くだらない』とでも言うかのように鼻を鳴らした。

「先だけにならない事を祈るよ、バリー君」

「そちらも、妨害だけは控えて戴くように。」

売り言葉に買い言葉。二人の間に火花が散り、我慢の限界に達しようとしていたその時、低い角笛の音が両者の間に割って入った。

「決着を着けるのは後回しのようだ。　　命拾いしたな、白騎士。」

「そちらこそ、ボスにやられて殉職。なんて事の無いように。」

「ぬかせ。」

バリーの応酬を一笑に臥すと、テントを出る間際に捨て台詞を残した。

「ならば勝負だ。このボス戦、ヤツの息の根を止めた者の勝利。報

酬は己のプライド、異存は無いな？」

「受けてたちますよ。」

一瞬の逡巡も見せる事無く言い放つと、彼女は挑戦的な笑みを浮かべたのみで、それ以上は何も言わず、外へと向かった。

割れんばかりの声援と拍手を受ける彼女を見据えて一歩、踏み出した。

《現在》

バリー      L V 3 7

？

第十層のフィールドを突き進む集団、攻略組プレイヤー達の行列は少なく見積もっても70人、いや80人はいるだろうか。

そんな大名行列の中盤辺り。ちょうど白軍と黒軍の境目に位置するそこにバリー達はいた。

「ええ、言つてやりましたよ。我が陣営からは死者を出す事は無い」と。

言い終えるや否や、反応は綺麗に二つに割れた。

ジャイロックやレイナを始めとする、称賛の拍手や言葉をかける者もう一方は溜め息を漏らしたり、無言で首を横に振ったり。といったように言葉にはしないが、非難の色を示す者。

例えば目の前で肩を落として少し頂垂れるこの男もそうだ。

「なんで君達はそう……いつもいつも角突き合わせて……ハア。」

もやし体型が輪をかけて痩せて いや、やつれて見える。本当に気苦労が絶えない人だ。

「頼むから大事にするのだけは勘弁してよ……？」

「白帝ガルバイン」ともあろう方が何を弱気な、」

そう。目の前の一見ひ弱そうな彼こそが 攻略組ギルド 《白光》のリーダーなのだ。こうして自信無さげに肩をすくめる姿からはとてもそうは見えないが。

「フレイルは怒ると本当に怖いんだから。」

昔の記憶を掘り返したのだろう、長い溜め息をついた。

「知ってますよ、嫌ってほどね。」

彼女との隔絶は何も今日に始まった事ではない。

「で、どうするんだい？その勝負。」

『一応訊いておくけど』とでも付け足しそうな口ぶりだ。

「勿論引き受けますよ 大丈夫ですよ、皆さんの命が最優先なのは変わりませんから。」

だからこそ戦術面に最も影響が少ない勝負なのだろう。あれでいて彼女も案外仲間思いなのかもしれない。

「ハア…本当に頼みますよ？君に脱落されたら困るんですから……無茶はしないように……。」

如何せん、自分があまりにも強過ぎるためか他人の事となるとどうにも心配症な面がある。それが純粹な優しさからである事も理解しているのだが。

「リーダー。」

そろそろ誰かが言ってやらないとな。

「僕達の実力を見くびらないでください。」

「いや、そんな事は……でも、そう思われても仕方無いのかも、しれませんか…。」

自覚はあったようで、何度目かの溜め息を漏らすとともに頂垂れた。

少し厭な言い方かもしれないが、これで良いんだ。

そう自分に言い聞かせて、彼から視線を剃らした。

『総員戦闘用意ーッ！！』

伝令と地を揺らす角笛の音が混ざり合う。

「それでは…援護よろしくお願いします。」

『まかせてバリたん』薄い胸を反らして馬鹿デカイ銃をドン！！と地面に降ろすレイナ。

壁のジャイロックも既にボスドロップである青銅の盾 《コバルトバレル》を肩に引っ提げて待っている。

「やっぱりその格好の方が似合ってますよ（笑）」

「バリー、君の方こそ“甲冑を着させたらTGO1の男”ではないか。後は早いとこ馬を見つけて手懐けないとな？」

暫しの沈黙。そして、

「ハハハ！……これは一本取られました。」

頭を掻く仕草をいかにもわざとらしくとると、普段は真一文字に結ばれている口許を綻ばせた。

「緊張でガチガチになってるかと思えば……どうやら余計な気遣いだったようだな。」

「いえ、お陰で肩の力が取れました。」

そう答えた俺の顔を横目で見遣ると、ゴツゴツした礫つぶてのような手で前方を指差し、

「そうか、それじゃあサクツとよろしく頼むぞ、“白騎士”」

ジャイロックの言葉が終わるか終わらないかのうちに、50メートルはあるつかという鉄の大門と彼らの間 僅か10メートル程に一陣の閃光が地を穿つ雷のように落とされ、収束し 形を成す。

「第一前衛隊 突撃いッ！！」

黒軍総指揮官、“黒后”フレイルの凜とした声が響き渡ると同時、ついに敵の全貌が顕になる。

岩をも弾く硬い鱗、鉄をも引き裂く鋭い爪、無数の棘に覆われた尻尾は二本の前肢と同様、一撃必殺の威力を秘めている。灼熱の火炎ブレスを吐き出すその口に至っては言わずもがな。

そう、誰もが知る想像上の生物 《ドラゴン》 十層の門番の頭

ボスモンスター



上に表示されたその名の下には二段に分かれたバー、すなわちこれまでのどの門番とは較べるべくも無い膨大なHPを持つ事を示している。

グルルルル…という唸り声と共に高温の蒸気を洩らすと同時に、純白の甲冑に身を包んだ“騎士”の足が地を抉りながら猛然と駆け出した。

「第二陣、スィッチ用意！！」<sup>交代</sup>「第三陣、負傷者が半数を超えました！！」「プレス来るぞッ！！壁《タンク》気張れよ！！」

戦闘開始から30分が経過した。

参加上限の100人で構成された大パーティーは苦戦しながらも少しずつ、しかし着実に目の前に立ちはだかる怪物のHPを削っている。

残り50%、これならいけるッ！！

確かに一撃が馬鹿みたいに重いが、モーションとプレス攻撃の溜めが長いためなんとか一人の脱落者も出す事無くここまで順調に進んでいる。

さてと、それじゃあ行きますか。

「sole ability 《ダルトニアン》」

《現在》  
バリ  
L  
V  
3  
7

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7157y/>

---

Twin Genesis Online

2011年11月26日16時55分発行